

# Grand Vision 2017

---

Noh Jesu が提唱する JAPAN MISSION

2011 / 4 / 2

ノ・ジェス

## 「復元」から「復興」へ、日本再生のグランドビジョン

この度の東北地方太平洋沖地震により被災された皆様には謹んでお見舞いを申し上げます。お亡くなりになられた方々に対しまして、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

皆様の安全と一日も早い復旧を祈念いたしまして、「(緊急提言)原発収束シナリオと中期計画」と震災復興後の日本再生へ向けた「日本再生のグランドビジョン」をご提案させていただきます。

一日も早く被災地が復旧され、放射能汚染の問題が解決し、日本の皆様が世界69億の人類を代表して、新しい時代を創造される未来を、心より祈念しております。

JAPAN MISSION 提唱者

Noh Jesu

## 目次

「復元」から「復興」へ、日本再生のグランドビジョン .....	2
政策提言 .....	5
(緊急提言)原発収束シナリオと中期計画 .....	6
2 原発への対処法 .....	6
3 原発問題の全体像 .....	6
4 現在の状況 (2011年4月2日現在) .....	6
4.1 現状 .....	7
4.2 原因 .....	7
4.3 回復までの手順 .....	8
4.3.1 汚染水の排出手順 .....	8
4.3.2 通常の復旧手順 .....	8
5 シナリオ .....	8
5.1 プラン A(冷温停止) .....	9
5.1.1 現在の状況 .....	9
5.1.2 課題、問題点 .....	9
5.1.3 リスクとメリット .....	10
5.2 プラン B(石棺封鎖) .....	10
5.2.1 メリット .....	10
5.2.2 課題、問題点、リスク .....	10
6 中長期的な課題 .....	11
6.1 人体への影響 .....	11
6.2 土壌汚染(農業、林業) .....	11
6.3 輸出産業へのダメージ .....	11
6.4 海洋汚染(漁業) .....	11
6.5 国際社会への配慮 .....	12
7 2015年までに必要とされる政策 .....	12
7.1 放射性物質除去技術の確立 .....	12
7.2 人体への影響度調査 .....	12
7.3 農作物、海産物などの基準管理 .....	12
7.4 「新領域技術」への投資 .....	12
8 新しい原子モデル .....	13

「復元」から「復興」へ、日本再生のグランドビジョン .....	14
1 「新しい日本」のコンセプト.....	14
9 日本の現在地.....	15
9.1 世界経済の潮流 .....	16
9.1.1 戦後から現在 .....	16
9.1.2 変化の方向性を喪失 .....	16
9.1.3 世界経済の潮流 .....	16
9.2 日本が直面する危機.....	16
9.3 現代人の心の状態.....	17
9.4 追い打ちをかけた震災.....	17
9.4.1 被災の影響.....	17
9.4.2 放射性物質の影響.....	17
9.4.3 心の健康.....	17
9.4.4 財政・産業への影響 .....	17
10 問題の本質.....	18
10.1 あらゆる問題の原因 .....	19
10.1.1 Shallow Life .....	19
10.1.2 人類のこれまでの生き方 .....	19
10.1.3 人類共通の根本原因.....	20
10.2 これまでの解決方法 .....	20
10.2.1 無秩序から秩序をつくる方法.....	20
10.2.2 その結果としての現代.....	21
10.2.3 「判断基準」の副作用.....	21
11 根本的な解決策.....	22
11.1 学術(科学技術)の大前提.....	22
11.2 観術(認識技術)の可能性.....	23
11.3 観術(認識技術)とは .....	24
11.4 3つの特徴.....	25
11.5 弊社の社会的役割 .....	25
12 グランドビジョン.....	25
12.1 認識経済.....	26
12.2 人文系ベンチャーの勃興.....	26
12.3 学問の再構築.....	26
12.4 新しい社会システムの構築.....	26
12.5 新しいライフスタイルの創造.....	26
12.6 新しい文化・文明の胎動 .....	26

## 政策提言

### 提言1. 放射能汚染を最低限に抑える「プラン B」へ移行を

- ① 放射性物質を緩慢と流出し続ける現行のシナリオでは、原子炉の冷温停止と廃炉までに数カ月～1年を要し、その期間、国民は目に見えない放射能に怯える生活を強いられる。輸出産業、観光業などへのダメージを最小限に抑え、環境汚染を最低限にする為にも、チェルノブイリ原発事故で採用された石棺方式による原発封鎖(プラン B)を提言する。
- ② 中長期的に懸念される人体への影響、農作物や土壌の汚染、海洋汚染を解決する為に、バイオテクノロジーを駆使した新薬の開発や放射性物質を体内から取り除く食品の開発、ファイトレメディエーション(植物を用いた地盤の浄化法)、細菌やバクテリアを活用した海水浄化技術を確認し、「放射性物質除去技術」で世界をリードする研究開発が必要。
- ③ 「放射性物質除去技術」を確認する為に、原子物理学、分子生物学、バイオテクノロジー、ナノテクノロジーへの投資と研究促進が必要。研究開発を推進すべく、「新しい原子モデル(原子模型)」を提案する。

### 提言2. 「Made in Japan」から「Heart of Japan」へ

- ① 被災地の「復元」に留まらず本物の「復興」とする為に、この震災を機に日本の一番の素晴らしさ「健康な心」、「和の心」をグローバルスタンダード化させ、東洋の悟りの世界と西洋の最終理論の世界を融合する新しい産業として雇用を創出しながら世界へ提供してゆくこと。
- ② あらゆる問題の原因は「判断基準」の異質性と不完全性。それを暴力・権力・財力などの力で支配することで秩序を維持してきた歴史を終わりにさせ、認識テクノロジー「観術」を道具に、日本から新しい時代を切り開くべき。
- ③ 心の差を取る(さとの)技術を応用・活用し、誰もが「健康な心」を得ることのできる教育産業、人づくり産業(0次産業)を創出。1～3次産業を次元上昇させながら、新しい認識方式をベースにした新しい学問、新しい社会システム、新しいライフスタイルを伴う、新しい文化・文明を創造し、世界へ発信してゆくべし。

## (緊急提言) 原発収束シナリオと中期計画

### 1 原発への対処法

地震と津波による被害に見舞われた東京電力の福島第一原子力発電所の対処法は、放射性物質を漏洩させながら数カ月かけて原子炉を冷温停止にさせるプラン A と、比較的短時間で福島第一原子力発電所を石棺で覆い、日本人の被爆量と海洋・土壌汚染、経済へのダメージを最小限に抑えるプラン B の2通りの対処法があります。

日本政府は、速やかにプラン B に移行することを提言致します。

以下、原発問題の全体像、現在の状況、シナリオの順に沿って解説いたします。

### 2 原発問題の全体像

原子力発電所では、トラブル発生による放射性物質の拡散を防止するため、その設計においては多重防護の考え方を採用し、事故の発生に到っても「原子炉を止める、冷やす、放射性物質を閉じ込める」という設計を行っています。

しかしながら、今回の震災においては、この「止める、冷やす、閉じ込める」の止める(原子炉の自動停止)には成功したものの、冷やす、閉じ込めるには至っていない状態です。

既に放射性物質は外部に漏れ、東日本各地の水道や空気、土壌、海水が汚染されている中、「如何に今後の被爆量を抑えるか」が焦眉の急ではないでしょうか。

### 3 現在の状況 (2011年4月2日現在)

※本内容は2011年4月2日時点までに入手できる情報をもとに作成されています。

最新の状況は、首相官邸ならびに各メディアや関係機関から公表される情報をご確認ください。

東京電力の福島第一原子力発電所からの流出が続く放射性物質により、東日本の空気、土壌、海水の汚染が続く中、原子炉の安全な冷却と沈静化の見通しは立たず、事故処理は数カ月から年単位の長期戦になる恐れが出てきました。

政府は30日、事態収拾の目途は立たないと表明。

次に挙げる理由などにより、1～3号機の復旧時期の目途は立っていません。

### 3.1 現状

- 1,2号機の原子炉が炉心溶融(メルトダウン)を起こし、核燃料(ウラン)の収まっている燃料棒や格納容器が著しく損傷。大量の核燃料がある原子炉とタービン建屋、外の坑道、地下水などが汚染水で直接つながっている。
- 1~3号機の汚染水の量は計1万3,000トン。処理の用途は未定。
- 敷地内の土壌からはプルトニウムを検出。
- 坑道(トレンチ)からは毎時1,000ミリシーベルト超の放射線量を計測。
- 海水から法令限度の4,385倍にあたる $180\text{Bq}/\text{cm}^3$ の放射性ヨウ素131を検出。
- 原発から30kmの浪江町や飯館村で、3,428~7,490マイクロシーベルトの放射線量を計測。自然界や医療行為以外で人が浴びてよいとされる年間許容量1,000マイクロシーベルトを超過。
- 原子炉、格納容器、建屋、燃料プール、配管など、損壊の全体像が不明。
- 今後も放射性物質の漏出は続くのか、原子炉内で何が起きているのか不明。
- 既に放出された放射性物質の累積量は米国スリーマイル島の事故以上。

### 3.2 原因

2号機は、3月11日の地震で緊急停止、14日に炉内の水位が下がり燃料棒が露出、空焚き状態に(この際に炉心が溶けた可能性大)、15日に格納容器下部にある圧力抑制室付近で爆発が起き、外部につながる配管に隙間ができた可能性あり(その隙間を通じて汚染水が建屋の外に達したと推測される)。

1,3号機も同様に炉心が溶融し、格納容器に隙間が生じている可能性あり。

基本的な構造は次の通り。

- 燃料(ウラン)を収める被膜管(ジルコニウム合金製)の耐熱温度は1,200度。
- ウラン燃料が溶ける温度は、2,800度。
- 原子炉の冷却ができないと燃料自らの熱により炉心が溶融して原子炉の底に溶融物(デブリ)が落ちる。
- さらに冷却ができないと落下したデブリの熱により原子炉容器の底が抜ける。
- 溶融物が格納容器の底を突き抜けてコンクリートと反応すると、大量の水素ガス等を放出。(水素爆発の原因)
- 冷却に失敗すると、事故の進展にともない水素爆発、水蒸気爆発、あるいは、再臨界が起こりうる。
- 爆発により格納容器が破損すると外部に大量の放射性物質が放出される。
- 大規模な爆発現象を伴うと、大量に放射性物質が飛び出し、チェルノブイリのような惨事となる可能性が大。
- 爆発を起こさない場合には、徐々にではあるが放射性物質が外部に出続ける可能

性がある(現在の2号機がこの状態)。

### 3.3 回復までの手順

原子炉を回復させるまでの基本的な手順と、直近で対処の必要なトレンチの汚染水を排出する手順は以下の通りです。

#### 3.3.1 汚染水の排出手順

- ① 原子炉建屋の圧力抑制室にあるタンクに「復水貯蔵タンク」の水を移す
- ② タービン建屋の「復水器」にある水を、空いた「復水貯蔵タンク」へ移す
- ③ 坑道と建屋内の汚染水を「復水器」に移して除去完了
- ④ 復旧作業を再開できる

※タンクの汚染水はタンカー、溜池、メガフロート等へ移送される予定。

#### 3.3.2 通常の復旧手順

- ① 電源回復
- ② 配線・機器の点検
- ③ 通電
- ④ 照明の復旧 (3/30時点で1~6号機は照明復旧済み)
- ⑤ 計測機器・中央制御室の復旧
- ⑥ ポンプなど冷却整備の点検
- ⑦ ポンプなどの補修・交換
- ⑧ 原子炉・使用済み燃料プールの水循環システムの再稼働
- ⑨ 海水による熱交換冷却システム再稼働
- ⑩ 冷温停止(水温が100°Cに下がり安定)

※通常手順では冷温停止後、廃炉・解体作業を開始可能。

## 4 シナリオ

今後想定されるシナリオは、大きく分けて2パターンあります。

原子炉の冷温停止を目指す現行のプラン A では、前述の「汚染水の排出」+「通常の手順」を経て事態の収束まで数カ月~1年は必要で、その間も徐々に放射性物質が外部に流出し続ける可能性があります。

石棺で封鎖するプラン B では、前述の「汚染水の排出」+「通常の手順」を経ず、チェルノブイリの事故同様に原子炉をコンクリートと金属などで覆い、放射性物質が外部に漏れいしないよう封じ込めます。

それぞれのリスクとメリット、課題などを具体的に見てみましょう。



#### 4.1 プラン A(冷温停止)

電源を普及させ、冷却システムを稼働させることで、原子炉を冷やしてから停止するプラン。原子炉付近の放射線量が高まると作業困難に。汚染水の排出に時間がかかるうえ、原子力発電所の各系統・配管・設備などの状態(どこが破損・故障しているか)も不明なので、復旧までには長期間必要。

##### 4.1.1 現在の状況

4月1日までの福島第一原発の状況は以下の通り。

	1号機	2号機	3号機	4号機	5・6号機
圧力容器	損傷△	損傷△	損傷△	—	安全
格納容器	微妙	損傷×	微妙	安全	安全
原子炉	損傷×	損傷×	損傷×	—	安全
燃料プール	不明	不明	損傷×	損傷×	安全
タービン建屋地下	汚染水	汚染水	汚染水	海水	—
電源	通電	通電	通電	通電	電源復旧
備考	水素爆発	壁損傷	水素爆発	一時火災	

損傷△(損傷の可能性あり)、損傷×(損傷の疑いあり)、微妙(安全と説明されている)

##### その他

- ・ 米軍、フランスの原子力関連企業などが協力中
- ・ 汚染水処理用にタンカー、メガフロートを手配中
- ・ 提供されたロボット、人員などが上手く使えていない
- ・ 粉じんの飛散防止に向け合成樹脂を散布

##### 4.1.2 課題、問題点

- ① 「汚染水の排出」+「通常の手順」を経ると、原子炉の冷温停止まで数カ月かかる可能性が大
- ② 汚染水の放射能レベルは測定器の針が振り切れるほど高い為、人が殆ど作業できない状態。(短時間交代で作業する場合、人員確保が課題)
- ③ 原子炉を冷やす為、外から水を注入すると漏れ出る汚染水の量も増える。「原子炉を冷やすには注水しなければならない」「汚染水の外部漏洩を防ぐには、あまり水を注いではならない」というダブルバインド状態。
- ④ 施設、設備、電気系統、配管などの多重故障の全体像が不明。
- ⑤ 汚染水の排出後も細かなトラブルや事故が発生する可能性大。
- ⑥ 数ヶ月間、外部に放射性物質を徐々に放出することに。

#### 4.1.3 リスクとメリット

- ① 事態が収束するまで放射性物質が外部環境へ放出され続ける。
- ② 福島原発から半径 30km 圏内は 30 年間ほど居住不可能に。
- ③ 汚染範囲が広がれば、他国への賠償責任も生じる可能性あり。
- ④ 関係各者の被爆量と死傷者が増加
- ⑤ 日本人の人体への影響と発病リスクが増大
- ⑥ 農林水産業を中心に輸出産業への経済的ダメージが増大
- ⑦ メリットは、成功すればそれ以後の懸念材料が1つなくなること。

#### 4.2 プラン B(石棺封鎖)

チェルノブイリ原発事故と同様、高濃度の放射性物質の拡散を止める為、福島第一原発をコンクリートと金属の壁で隙間なく囲い封鎖する方法(石棺方式)。比較的短期間で放射性物質の外部環境への拡散は止められるが、地中への汚染は残る。また、100 年間の監視と安全管理が必要で、長期間に渡ってコスト負担も生じる。

##### 4.2.1 メリット

- ① プラン A に比べ短期間で放射性物質の外部環境への漏洩を防止可能
- ② 半径 10~30km 圏内を居住地として利用可能か
- ③ 高濃度の放射性物質による海洋汚染も最小限に抑えられる
- ④ 国際社会の不安心理も早期に解消
- ⑤ 関係各者の被爆量と死傷者を比較的減らすことができる
- ⑥ 日本人の被爆量と発病リスクも相対的に減少
- ⑦ 輸出産業へ与えるダメージも最小限に抑えられる

##### 4.2.2 課題、問題点、リスク

- ① 地中への放射能汚染は残る
- ② 既に海洋、空気中へ放出された放射性物質の除去が課題
- ③ 石棺の維持にはコストと時間が掛る(年 20 億円程度の管理費と 100 年間以上の監視・安全管理が必要)
- ④ 炉心の温度が高い状態ではコンクリートの外壁が割れてしまう為、先に炉心を冷却する必要がある。(減速材と液体金属を注入する方法ならば、早急に実施可能。)
- ⑤ 原子炉付近の放射線量が減少しない場合、「石棺」作業を担当する人員は、大量の被爆を覚悟しなければならない。(ロボットで代用可能か)
- ⑥ 将来、地震等により石棺が損傷し、放射性物質が漏れ出すリスクがある。

以上の条件・状況などを鑑みるに、プラン A を遂行した場合の原子炉1基あたりの復旧成功確率を 50%だと仮定すると、4 基すべてが成功する確率は 0.5 の 4 乗で 6.25%となる。

成功確率がこれほど小さく、完了までに数か月から数十年かかると見られるプラン A を止め、これ以上被害規模を大きくしない為にも、チェルノブイリ事故では 11 日間で放射性物質の拡散を停止させたプラン B を東京電力ならびに日本政府は速やかに選択されることを提言致します。

## 5 中長期的な課題

どちらのプランを選択しても想定される今後の課題は、主に以下の 5 項目になるのではないのでしょうか。それぞれの項目に対して、「解決策」を得る為の政策が中長期的に求められてくると考えます。

### 5.1 人体への影響

人体に蓄積し、内部被曝をもたらす放射性物質（主にヨウ素 131 による甲状腺がん）への対策が急務。海産物に濃縮されるセシウム 137 等の監視強化も必要。測定結果を透明化し、福島近隣5県産の農作物には政府保証の「放射能ゼロ」ラベルを貼って出荷するなどの対策が必要。

### 5.2 土壌汚染(農業、林業)

放射性物質による土壌汚染と農作物の被曝に対して、イメージが先行して惑わされないよう、事実とデータに基づく啓蒙活動が必要。土壌が農作物に与える影響と、被曝した農作物の摂取が実際にどの程度人体等への影響を与えるのかを調査し、統計データとして蓄積することが求められる。

### 5.3 輸出産業へのダメージ

世界中のメディアとのパブリック&リレーションを駆使して、「イメージ」ではなく「事実」を認識して貰う努力が必要に。この事故を機に日本全体のものづくり産業は大きなダメージを受ける為、多くの被雇用者は「日本再生へのグランドビジョン」にて後述する新しい産業へソフトランディングしてゆく必要に迫られる。

### 5.4 海洋汚染(漁業)

放射性物質が海洋と生態系に及ぼす影響を注視する必要がある。漁業者への所得保障を行いながら、魚の摂取が実際に人体に与える影響を長期間にわたって調査し、統計データをもとに魚介類の安全性を立証してゆくことが求められる。

### 5.5 国際社会への配慮

偏西風を通じて北半球を一周した放射性物質に、各国の国民が心理的な不安を抱き、憶測などからパニックに到らぬよう、日本政府は世界に向けて正確な情報をスピーディーに誠実な姿勢で発信していくことが求められる。

## 6 2015年までに必要とされる政策

石棺で封鎖した場合も土壌への汚染は進む為、ファイトレメディエーション(植物を用いた地盤浄化法)や海洋浄化技術を確認し、内部被曝を解決する新薬や食品の開発など、「新領域技術」への投資・開発を促進させ、世界における放射能除去技術分野で世界をリードすることが、今後世界から求められるでしょう。

### 6.1 放射性物質除去技術の確立

ひまわり、菜の花、産業用大麻などが土壌の汚染物質を吸い上げるファイトレメディエーション(植物を用いた地盤の浄化法)、ロドコッカス・エリスロポリスなどの細菌やバクテリア、海藻などを活用した海水の浄化技術を確認し、「放射性物質除去技術」を環境技術の一分野として国内で体系化。今後、世界各国で同様の事故が発生した際に、日本がリードしてゆく体制を整える。

### 6.2 人体への影響度調査

ヨウ素 131、セシウム 137 による内部被曝などへの対応策として、放射性物質のパートナーとして体内で出会い、ターゲットとなる放射性物質と結合して排出されてゆくような薬剤や食品等の開発が急がれる。また、大規模な放射線量の蓄積に関する調査を実施し、今後の世界の為に有用なデータを残すことが求められる。

### 6.3 農作物、海産物などの基準管理

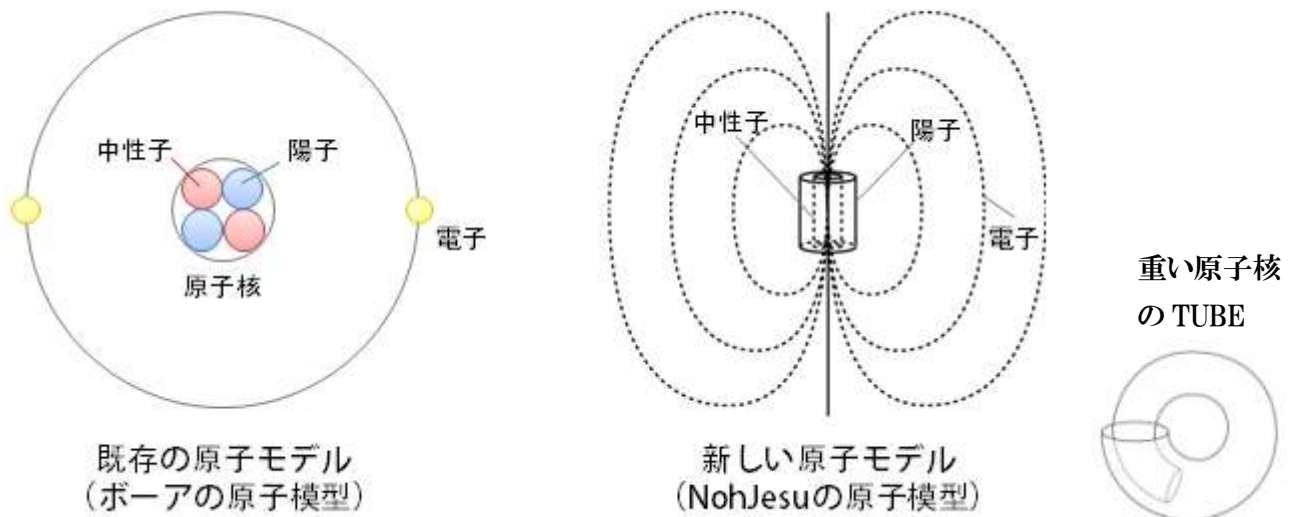
微量でも放射性物質が付着した農作物や、低濃度汚染された魚介類などの安全基準を新たに見直し、国内独自の基準作りが必要。放射線( $\alpha$ 線、 $\beta$ 線、 $\gamma$ 線、中性子線)が、高速で飛ぶヘリウム核、電子、電磁波、中性子であることを啓蒙し、遺伝子の損傷や細胞のコピーミスがなければ特段害のないことを実証するデータを蓄積。20年後の世界基準を日本が創るべく必要なデータを蓄積する。

### 6.4 「新領域技術」への投資

新しい日本が必要とする様々な技術の開発がスムーズに進むべく、原子物理学、分子生物学、バイオテクノロジー、ナノテクノロジーなどへの投資を促進。新領域技術をベースにした研究開発～商品開発までの流れを活発化させ、新しい市場と雇用を創出してゆく。

## 7 新しい原子モデル

人体や土壌・海洋から放射性物質を除去する技術を研究・開発する上で、特に期待を寄せられるのが「原子物理学」でしょう。その研究開発のスピードを高め、放射能の本質を理解し、効率よく技術を開発する為に、私は次の原子モデルを提案いたします。



球をベースにしたボーアの原子模型と比べると、私の提案する原子模型は、存在の基本単位は球ではなくTUBE(チューブ)であると規定しています。

チューブである理由は、すべての存在を存在させ、変化・運動・移動させている実体は「中外ひっくり返す、圧縮・爆発・膨張の5次元の動き」であるという大前提がある為です。

この「中外ひっくり返す、圧縮・爆発・膨張の5次元の動き」が存在としてみえるとき、内側のチューブは中性子、チューブの外側は陽子、入って出ているものが電子として存在するようにみえている、というモデルです。原子核の重さに従い、右上図のようにチューブは進化していきます。

日本の未来の為に研究・開発をされる科学者の皆様は、古いモデルをベースとした研究だけでなく、是非この新しい原子モデルをベースにした研究開発も進めて頂ければと存じます。これまで繋がらなかったことが繋がり、必ず新しい科学の地平が拓けます。21世紀は、意識と物質を統合する為にも、原子モデルを変化させる必要があると思います。

一日も早く被災地が復旧し、福島原子力発電所と放射能汚染の問題から国民が解放され、日本が新しい未来へと向けて歩んでいけることを、心より願っております。

Noh Jesu

## 「復元」から「復興」へ、日本再生のグランドビジョン

### 1 「新しい日本」のコンセプト

東日本大震災の残した風景は、まるで大きな戦争に敗北した国土のようにも映ります。

- ① 2万名以上の死者・行方不明者を出し、
- ② 放射能に汚染された身内の遺体を確認することも許されず、
- ③ 都市インフラはことごとく破壊され、
- ④ 国内の電力も20%が失われた今、
- ⑤ 福島原発の30km圏内は居住不可能となり、
- ⑥ 海外企業はサプライチェーンから日本を外し、
- ⑦ 放射性物質を忌諱した各国が日本の農産物等の輸入停止を始めた今、

モノづくりと輸出産業、観光業、農林水産業は大きなダメージを受けながら、今後の取引さえ危うい瀬戸際に立たされた日本。この状態を、敗戦に例えるのであれば、その戦争の性格はどういうものだったのでしょうか。原因があって何かに敗れたのであれば、悔しいとは思わないでしょうか？

日本全体が復興に向かう為に、どんな思いを選択すればよいのか？その「復興のエンジン」を「戦争に負けた悔しい思い」でイメージしながら団結することも、ひとつの方便になるかも知れません。もし、この震災が今までの生き方や生きる姿勢を問い直す意味を持つのであれば、私たちは敗北の原因を知る必要があります。

そして明治維新、戦後の復興を経て、第3の奇跡が待望される今、多くの日本人が心と力を集結して、達成したい！と思える「新しい価値」、「新しい文明の姿」が必要なのです。

## 「Made in Japan」から「Heart of Japan」へ

この震災を機に「絆」を取り戻し始めた日本の姿に、今、世界中が注目しています。ハリケーン・カトリーナが来襲したフロリダ州では警官さえもが略奪し、韓国で同様の震災に見舞われたら国そのものが崩壊するだろうと噂されるなか、略奪や暴動が起きるところか、規則正しく行動し、動揺することのない被災者、「人の為に」と助け合い、支え合う日本の国民性は世界各国からも高く評価されています。

戦後の焼け野原からスタートした日本が、「Made in Japan」で世界トップになれたのは何故なのか？それは世界最高峰のモノをつくることのできる繊細な心があったからです。東洋の奇跡を可能にさせた「日本人の心」、「和の精神」をグローバルスタンダード化させ、新しい産業として雇用を創出しながら世界に提供していくことが、これからの日本の使命ではないでしょうか。

サムライが過去と自らの既得権を斬って成し遂げた明治維新と、焼け野原から高度経済成長を実現した戦後の復興では、海外に模倣すべきモデルがありました。しかし、今回は日本が世界に先駆けて、まったく新しい文化・文明を創造してゆくことが必要です。

どうすれば死を恐れない健康な心をグローバルスタンダード化することができるのか、なにがこれまで人の「絆」を深めることを阻害してきたのか？その敗戦の原因は「根本判断基準」に他なりません。

- ① 誰もが判断基準を持っている
- ② その判断基準が皆、バラバラ(だから争いが絶えない)
- ③ 全部ひとつにしても問題
- ④ 誰の判断基準も不完全
- ⑤ 自分の判断基準は絶対正しいと思い込んでいる

この「根本判断基準」の問題を解決できない状態では、人と人が分かり合うことができません。人々が絆を深め、和の社会を体現することも叶いません。

その昔、同じ負け方を繰り返すことは「侍の恥」とされました。

外側の支配権力である「王様」は、フランス市民革命により打ち倒され、いま内側の支配権力である「根本判断基準」の問題を解決することができない文化・文明が続いています。私たちが、この問題を置いておいて同じ過ちを繰り返すのであれば、人間として江戸時代から進化発展していないことになるのです。

今回の震災を受けて多方面から日本の復興を望む声が多いものの、「新しい日本」を望みながら、3.11の前の状態に戻る「復元」では、日本の未来に希望を抱くことはできません。真の復興を果たす為には、「根本判断基準」の問題を明確に解決し、同じ負け方をしないことが重要です。

本章では、その為の代案を、日本の現在地、問題の本質、解決策、グランドビジョンの順にお伝えしていきたいと思えます。

## 8 日本の現在地

3.11の前、日本がどのような状態であったのか。世界経済の潮流から日本と個人の状態を俯瞰しながら、なぜ「復元」では限界なのか、その問題の本質に迫ります。

## 8.1 世界経済の潮流

### 8.1.1 戦後から現在

明治維新、戦後の復興を経て、モノづくりで世界トップになった日本。その日本をみて、同じ土俵では勝てないと悟った欧米が金融経済へシフトし、行き過ぎた資本主義の果てに金融バブルが崩壊。世界的な経済危機を招きました。

中央銀行は 0 金利政策と量的緩和で市場にマネーを供給する「点滴」を施すものの、「供給過剰」の時代に個人消費は落ち込み、労働市場にも回復の見込みはなく、国家破綻が危惧されていた頃に、追い打ちをかけたような今回の震災で、世界経済の牽引役であった日米が大きなダメージを受けている状態です。

### 8.1.2 変化の方向性を喪失

リーマン・ショック以降、先進国は変化の方向性を失い、世界では 2 億 3,000 万人以上の雇用が失われ、新しい産業と新しい雇用を創出する必要性が叫ばれる中、IT 産業、金融産業に続く、革新的な産業はなかなか見つかっていません。

その中でも日本は GDP の 200%近い借金を抱え、国債の暴落を機にした国家破綻まで危ぶまれています。19 世紀のイギリスが産業革命の成長を原動力として、GDP の 290%まで積み上がった政府債務を 100 年かけて返済したように、今年も日本でも明治維新、戦後復興に次ぐ第三の革命が期待されているのです。

### 8.1.3 世界経済の潮流

世界は今、政治・経済に留まらず多様な戦いを内包しています。

- ① 中東革命(チュニジア、エジプト、リビアほか)
- ② 報道戦争(ウイキリークス)
- ③ 貿易戦争(TPP、FTA など)
- ④ カレンシーウォー(通貨戦争)
- ⑤ 財政破たん懸念(ギリシャ、イタリア、ポルトガル、アイスランド)
- ⑥ 中央銀行の機能マヒ
- ⑦ 新しい産業と雇用が創出できない

## 8.2 日本が直面する危機

そんな中、日本は次のような問題に直面しています。

- ① 恒常的な円高
- ② 供給過剰と消費マインドの低下
- ③ 雇用の海外流出、雇用なき成長
- ④ 少子高齢化



- ⑤ 社会福祉コストの増大
- ⑥ 年金システムの破たん
- ⑦ 無縁社会
- ⑧ 12年連続で自殺者3万人超
- ⑨ うつ病100万人を突破
- ⑩ 2017年までに国家破綻の懸念
- ⑪ 2018年には脳を超えるコンピューターが登場

### 8.3 現代人の心の状態

このような時代の中で、現代人の心は下記のような状態を呈しています。

- ✓ 何をやってもスッキリしない(何もかもが複雑)
- ✓ ストレス・プレッシャーがいっぱい(～ねばならない、やらされている)
- ✓ 気付き・感動が溢れない(マンネリ・過去中毒)
- ✓ やる気・アイデアが出ない(相対比較・自信喪失、比較対象は増える一方)

### 8.4 追い打ちをかけた震災

この度の震災で、さらに状況は悪化しました。

#### 8.4.1 被災の影響

- 工場の操業停止、一時休業
- 売上、会社経営への波及
- 倒産、リストラなど

#### 8.4.2 放射性物質の影響

- 水道水、工業用水、海洋の汚染
- 空気、土壌、農作物の汚染
- 国内の農林水産業と輸出産業、観光業に大ダメージ
- 福島原発30km圏内の陸の孤島化

#### 8.4.3 心の健康

- 蓄積する不安、恐怖
- PTSD、パニック症候群などの増加
- ネット上の情報などによるデマの拡大

#### 8.4.4 財政・産業への影響

- 放射性物質を忌諱した輸入停止による貿易赤字の拡大
- 自粛ムードにおける消費低迷

- 計画停電による GDP の低下
- 税収の低下と財政赤字の拡大
- 被災地の復興（インフラ、衣食住、雇用など）に掛かる莫大な費用負担
- 原発補償における 2 兆円を超える費用負担
- 自然環境汚染に対する各国への損害賠償懸念

以上の状況を鑑みると、震災による様々な影響から回復し、被災地の立て直しができたとしても、多くの課題が山積していることが解かります。震災からの復旧だけでも相当の時間と費用が必要となり、広範囲かつ大規模な計画と、オールジャパン体制で臨むことが求められます。

元に戻すだけの「復元」では、この危機をチャンスに活かすことはできません。

放射性物質を怖れて農作物、水産品に留まらず工業製品まで輸入停止にされ、世界のサプライチェーンが日本抜きで進む今、私たちはどんな日本を立て直せばいいのでしょうか？

日本は、世界 2 位の経済大国になった時、1 位の米国を越える新しい世界観や価値観を打ち出すことなく欧米の追従を続けました。その結果がバブル崩壊と失われた 20 年です。

これほどの犠牲を伴った経験を共有しながら、西洋の学術的な理解方式・思考方式をベースにした文化・文明に立ち戻ろうというのでは、日本は時計の針を 10 年前に戻すことになりかねません。

日本の一番の素晴らしさ、日本オリジナルの価値観で、世界に通用し、世界からも高く評価されているものは「和の心」に他ならないのではないのでしょうか。

地震と津波ですべてを失っても己を見失わない「侍の不動心」、世界トップのモノづくりを可能にした繊細な「日本の心」を、東洋の悟りの世界と西洋の最終理論の融合を通してグローバルスタンダード化させ、世界に誇れる輸出産業、教育産業として育て上げる為には、いったい何が必要なのでしょう？

## 9 問題の本質

人間が消費動物のように生きる表面的な生き方を促し、人と人が繋がれないようにさせていた原因、「和の精神」や「絆」を深めることを阻害してきたものの正体とは何でしょうか？

## 9.1 あらゆる問題の原因

### 9.1.1 Shallow Life

「あなたは、この商品を買えば幸せになれます」、「うちで買った方がお得ですよ」、「私のサービスを受ければ成功人生を送れます」など、様々な企業、お店、個人が、それぞれのプラン、ビジョン、ドリームを宣伝し合い、『ビジョン戦争』といえるほど多様な広告と宣伝、情報と知識に満ち溢れている現代ですが、表面的な生き方(Shallow Life)を促してきた原因は、主に次の5つではないでしょうか。

- ① 中央銀行(通貨発行権)を保有し、世界の富を支配する0.1%の人々
- ② 大企業、マスコミ、国家権力などの既得権益層
- ③ 愚民政策(3S 政策)で人間を消費動物化させ、薄っぺらい表面的な生き方(Shallow Life)を助長する政府
- ④ 共同体を分断、孤立、疎外、弱体化させる西洋的、学術的な理解方式・認識方式
- ⑤ 五感覚と考えに支配される脳

資本主義社会では、共同体を分離・断絶させ、個人のエゴを増幅させ、プライバシーを重視した方がモノは売れます。一家に一台のテレビをお茶の間で見る文化ではテレビは1台しか売れませんが、家族の皆が別々の部屋で自分の好きなことをする文化・思考方式にすれば、より多くのテレビが売れるようになります。

このような資本主義、政治、常識(のベースとなる西洋的思考方式)の中で、これが○、正しい、かっこいい、これは×、間違っている、かっこ悪いと覚えさせられ、刷りこまれた結果を、多くの人が「自分の考え、価値観だ」と思い込んでいるのは悲しいことでもあります。今の生き方は、本当に人間が望む本来の生き方でしょうか？

### 9.1.2 人類のこれまでの生き方

古来より人類は主に2つの生き方を追求してきました。愛する人の死など、耐えられないような「悲しみ」を減らそうと宗教や思想哲学を発達させ、多様な考え方や思い方の道を構築し、また一方では「喜び・楽しみ」を増やそうと科学技術を発展させ、より多くのモノ商品を開発してきました。

2,000年以上続けてきたこの活動の結果、我々は今、どのような時代を迎えているのでしょうか？

宗教や思想哲学を幾ら追求しても、いつも心がスッキリと晴れている人は少な

く、学問やテクノロジーは進化したけれど、未来は明るくありません。それぞれの時代において、誰もが理想を目指して努力してきたはずなのに、なぜ世界は現在のような状態に留まっているのでしょうか？

### 9.1.3 人類共通の根本原因

現代のように多様な問題を地球上に生み出した人類共通の根本原因は、「判断基準」でシンプルに整理できます。

- 1.誰もが判断基準を持っている
- 2.その判断基準は皆バラバラ
- 3.皆がまったく同じでも問題
- 4.誰の判断基準も不完全
- 5.しかし「自分の判断基準は絶対正しい」と無意識で思い込んでいる

人間が生きていれば様々な悩みや苦しみと出会いますが、相手が人間であれば、育った環境も親から受けた教育も好きだった友達も異なります。考え方も価値観もまったく同じ人間というのは、69億の人類をみてもなかなか居るものではありません。職場の同僚は言うまでもなく、夫婦や恋人でさえ意見が食い違ってしまうのは、判断基準が皆異なるからなのです。

価値観や判断基準が異なれば、摩擦・衝突・葛藤が尽きず、国家・民族・宗教の価値観の違いによる紛争、戦争が絶えません。かといって全員の判断基準をひとつにしてしまったら、ファシズムやロボットのようになってしまう、もっと大きな問題が起こります。

五感覚と脳に依存した人間は部分しか認識できない為、全体や完全を認識することはできず、故に誰かの判断基準が完全である、ということもありません。しかしながら、皆が無意識深くでは「自分の判断基準は絶対に正しい」と思い込み、そこから出発してコミュニケーションをするので、人と人が分かり合うことが難しくなっているのです。

この判断基準の問題を置いておいて、成功・幸せになることは絶対に不可能です。では、この本質的な問題をどのように解決すればよいのでしょうか？

## 9.2 これまでの解決方法

### 9.2.1 無秩序から秩序をつくる方法

判断基準の異質性(価値観の多様性)をそのままにしておいた状態では、無秩序(カオス)になってしまいます。これまでの人類は、それを暴力・権力・財力

など「力」による支配によって秩序を構築してきました。

最初は、自然が動物と人間を戦うようにさせ、バラバラの判断基準で動く人々の集団は大きな獣に襲われて生き残れない状況が続きました。やがて、リーダーの判断基準を中心軸として団結した集団が狩りに成功し、多くの人を従えるようになったリーダーは、やがて王となってゆきます。

王の判断基準に従わない者は家族共々殺され、力によって支配する側と支配される側が分かれるようになっていきます。やがて産業革命、民主主義革命を通して、「暴力」は「財力」に代わり、現代ではお金を持つ人がお金を持たない人を支配し、リーダーの判断基準に従わせるようになってきました。お金を判断基準の中心に置いているのが、現代の資本主義です。

### 9.2.2 その結果としての現代

その時代、その地域に属する言語・秩序や約束体系・ルール・法律によって、人々の言動は規定され、○×、善悪、好き嫌い、やって良い悪いという多様な判断基準をこの 2,000 年以上蓄積してきました。

その結果、現代は「思考の圧縮」を受ける構図をより強固にしています。

社会人だったら○○しなければならない、女だったらこう振る舞うべきだ、空気を読まなかったら・・・など「○○だったら△△すべき」という○×、善悪、好き嫌い、やっていいやってはいけないという様々な判断基準が蓄積され、現代人は多くのストレス、プレッシャー、疎外感、孤独感、閉そく感、無力感を感じるようになっていきます。

さらに「思考の圧縮」が強くなると、うつ、引きこもりになり、外部からの情報と圧縮を回避するようになりますが、インターネットなどを通して情報知識に溢れる現代では、さらに考えの圧縮にさらされて、極限まで蓄積された「考え」が爆発するとき、その方向性が内に向かう人は自殺し、外に向かう人は殺人などの事件を引き起こすようになっているのです。

### 9.2.3 「判断基準」の副作用

この「根本判断基準」には、不都合な副作用もあります。人が皆、自分の観点に固定されやすいことから、自分と自分ではない世界を分離・断絶し、自分の思考体系を固定・クローズして、そこに多様な情報知識を取り入れて行くので、やがて考えでいっぱいになり苦しくなっていきます。

その結果、相対比較による自己否定・他人否定に陥り、特に世界中の情報に簡単にアクセスできる現代では、比較対象が多いので自分の価値判断に自信が持てなくなっていく。その結果、意志決定を組織や他人に任せ、トラブルや問題が起きると、その他人のせい、組織のせいにして、責任逃避することが習慣化されます。

意思決定を人に依存すれば、人生はつまらなく、意味価値も解らなくなっていく、他者に対する無関心、無感動、無気力、孤独、疎外感を蓄積することになります。その結果、他人への配慮、関心、愛、信頼は薄くなり、多くの人がこの状態になっていくと無縁社会のような現代社会の様々な問題につながっていきます。

この「判断基準」の問題を、どうすれば解決することができるのでしょうか。

## 10 根本的な解決策

判断基準は皆バラバラで、一つにまとめても問題。誰もが不完全だけど、皆「自分の判断基準は正しい」と信じている。この人類共通の根本原因から、あらゆる問題が生まれてきています。

この「判断基準」の問題を置いておいて、人と人が解かり合うことはできません。

人間を理解し、関係性を築くことなしに、人生で成功し、幸せになることは絶対に不可能です。この「人間」を理解する上で、これまでメジャーだった宗教・思想・哲学、そして学術(科学技術)には、いったい何が足りなかったのでしょうか。そして、何があればこの判断基準の問題をクリアすることができるのでしょうか。

### 10.1 学術(科学技術)の大前提

人間を理解する為の理解方式・認識方式は、今まで学術(科学技術)がメジャーでした。ところが、モノを変化させることのできる科学技術では、判断基準の問題は解決されません。むしろ“知っている世界”が増えれば増えるほど、それだけ○×(判断のモノサシ)も増えて、対立をひどくしています。

科学の限界は、その根っこにある考え方、大前提にあります。

その考え方とは、「認識主体の観察行為は認識対象に何の影響力も与えずに、認識対象そのままを認識、観察できる」という大前提を 100%矛盾がないものとして当然視してしまっているということです。

さらに、「認識される認識対象は、0.00000001 秒単位で観察した場合でも、ずっと

同じ物理的性質を維持し続ける」という連続状態を大前提にし、そこに対して何の厳しいチェックや疑いもなかった為に、それが当然のように勝手に決め付けて矛盾を持っているのが、今までの学問“探求方式”の限界なのです。

その学術的理解方式をベースに、人間が作り上げてきたのが数学・物理学・経済学と今の資本主義社会であり、そのベースの上で活動している企業活動では、この理解方式の範囲を越える結果を出すことはできません。

逆に、このような学術的理解方式を補完して、認識主体と認識対象の大前提に問題がないかを、徹底的に確認する過程を取り入れることができれば、これまで未解決だった問題の多くを解決することができるようになります。

## 10.2 観術(認識技術)の可能性

この学術(科学技術)の限界を補う為に開発されたのが、観術(認識技術)です。観術とは、認識対象を観察・研究し、変化させることのできる科学技術を補い、認識主体を洞察し、観点を変化させることのできる技術(認識技術)です。

観術は、学術の最高のパートナーといえます。

この15年間で「観術」をベースに、認識の主体と客体を取り入れた全体像が見える統合認識学問「HITOTSU 学」も体系化されており、存在が認識の産物に過ぎないことは、今や多くの脳科学も証明しています。そして、これまでの科学の大前提とされていた根拠が実は間違っていたことが、「観術」により確認されています。

古代・中世の宗教・思想・哲学的な理解方式・認識方式では根本問題が解決せず、近代・現代の数学・物理学など学術的な理解方式・認識方式だけでも限界を迎えつつある今、これからの時代、未来の人類にとって、新しい認識方式を得る術である「観術」が必要とされてくるのではないのでしょうか。

現代は多くの情報知識が溢れ、ツイッターやフェイスブックなど、次々と登場するソーシャルメディアに対応していると、情報の洪水に飲み込まれそうになります。「キュレーションの時代」といわれるように、大量の情報知識を消化・吸収し、整理整頓できる理解方式・新しい認識方式がクリエイティブ産業で特に必要とされています。

震災後に広がる PTSD や心の病についても同様に、多様なストレス・プレッシャーを軽減し、自らの考え・感情から自由に解放される認識の仕方、人間関係の摩擦・衝突・葛藤を処理する「新しいものの観方」が、これほど必要とされている時代はありません。

観術(認識技術)は、学術(科学技術)の限界を補いながら、これらのニーズを満たすことのできるまったく新しいソリューションであり、五感覚と脳に依存した人間の機能を進化させ、心の器を大きくさせて、心の差を取る(さとの)ことのできる技術でもありません。

※多くの技術がそうであるように、観術(認識技術)も、ある発見をベースに発明されました。1996年に日本(福岡)で発見された「心と力と物質を統合するイメージ」の発見がベースとなり、およそ15年の研究開発を経て、5次元認識テクノロジー「観術」ならびに HITOTSU 学として体系化されています。

### 10.3 観術(認識技術)とは

心の差を取る(違いを取る)ことを「悟り」といいますが、観術が案内する「21世紀の悟り」とは、一番大きな格差(違い)をとれる状態を意味しています。

人間にとって一番大きな違いとは、前述した「判断基準」の問題です。

判断基準が原因で多様な問題が生じており、アルベルト・アインシュタイン博士の言葉通り「問題を作り出した意識と同じ意識では、その問題を解決することができないのです。」

観術とは、五感覚と脳が認識する4次元の錯覚世界を越え、イメージ感覚で真実の世界を認識できる「次元上昇した観点」を獲得する術でもあります。その本質世界を論理とイメージで明確に説明することができ、誰もが悟れるように教育プログラムとして体系化したものが認識技術(観術)です。

人間は、意識の進化ができる存在です。

今までの人類の歴史を振り返ると、人間は、自分の外側の環境を変化させる技術・道具・システムを開発・開拓し続け、それを扱う人間そのものの進化発展をおさなりにしてきました。

西洋の学術的な理解方式・認識方式を卒業し、日本文化が有する「わびさびの美学」、「侍の不動心」、「和の心」など、人間そのものを進化発展させ、人間の尊厳性、人間精神の進化発展を促す新しい文化文明を、日本から世界に発信していくことが必要なのではないのでしょうか。

人間そのものが絶望、人間そのものが孤独、人間そのものが諦め・挫折になってしまっている今の時代に一番必要な変化は、「人間そのもののイノベーション(革新)」です。西洋発の物質文明から日本発の精神文明にプレートチェンジするタイミングは、今この時であるように感じます。



#### 10.4 3つの特徴

観術の特徴を3つで現わすとすれば、「出発点」、「今ここスッキリ」、「イメージ言語」です。

「出発点」とは、認識対象を観察する西洋の科学的アプローチでは、存在の「究極の材料」であり、認識主体を洞察する東洋の悟り的なアプローチでは、人間の「本来の心」でもあります。この東洋の宗教・思想哲学と西洋の数学・物理学などの最先端科学を融合させる「出発点」のイメージ、次元上昇したシンプルなひとつのイメージが観術にはあります。

また、認識主体と認識対象の差が取れることから、いつもスッキリ、今ここ最高、感動の心の状態になります。条件・状況・環境に囚われることなく、永遠に変わらないひとつから現実世界(認識画面)を認識することができるので、無駄な考え・感情も湧かなくなってきました。

3点目の「イメージ言語」は、この本質世界(絶対世界、真実の世界)を表現しようと過去にチャレンジしてきた多くの偉人が語った言葉(ヘブライ語、サンスクリット語、中国語、英語などによる聖書、道德経、コーラン、般若心経、相対性理論、量子力学など)では単語によってイメージのズレが起きるため伝達に限界があり、その限界を突破する為に開発された新しい言語です。その名の通り、シンプルな2つのイメージ言語で本質世界のイメージをそのまま伝えることができます。

※本質世界(心、無意識)のイメージ化は世界初。

#### 10.5 弊社の社会的役割

IT 産業を興す際に、マイクロソフト社がパソコンの OS を提供したように、NR JAPAN 株式会社は、認識の OS をすべての人々に提供いたします。IT 市場が OS だけでは成り立たないように、NR JAPAN の果たす役割も縁の下の的な位置づけとなるでしょう。

アプリケーションソフトやプロバイダー、ポータルサイト、SNS など、多様なインターネットサービスが 10 年弱で開花し、何もないところから 100 兆円以上の市場が創造されたように、認識の変化は新たなブルーオーシャンを開拓します。

### 11 グランドビジョン

この新しい認識方式は、天動説から地動説へとパラダイムの転換が起きたとき以上に大きなショックをもたらし、様々な分野で新しい産業と学問を生み出す原動力に成ります。

人間そのものが変化する「悟り」を産業化、一般常識化することで、日本発の新しい文化・文明を創造し、暗雲に覆われた世界経済を日本が確実にリードしていけるようになります。

### 11.1 認識経済

観点を変化・運動・移動させ、次元上昇した観点を獲得する「認識経済」は、誰もが当たり前のように悟ることができる人づくり産業(0次産業)として、1次産業～3次産業までのあらゆる産業をバージョンアップさせることができます。

### 11.2 人文系ベンチャーの勃興

例えば、誰もがいつでもできること(文字を書く、お茶を入れる)に悟りをプラスして、芸術として昇華させた書道、茶道などのように、日本には真理・悟りが根底にある産業(伝統産業)や武道(剣術、柔術など)が今も継承されています。

これらの伝統産業に今一度、本質を取り戻し、ITベンチャー、理工系ベンチャーのように、若者が人文系ベンチャーで起業する流れも加速するでしょう。

### 11.3 学問の再構築

物の理を追究してきた物理学、心の理を追求してきた心理学なども、次元上昇したひとつの観点から整理統合することができ、心と力と物質をつなげた新しい学問を創造し、宇宙自然の構造・仕組みを演繹的に発見することも可能になってきます。

多様な分野の学問で、創造的破壊が行われ、「出発点」のイメージが接着剤となることで、異なる領域の科学をつなげ合わせ、新しい時代を担う研究開発が促進されることでしょう。

### 11.4 新しい社会システムの構築

古い経済学、古い数学・物理学から卒業し、観術により補完された新しい経済学、新しい数学・物理学(統一理論)をベースとした研究・開発からは、これまでに想像もできなかったような新しい社会システムを描き、実現することが可能になってきます。

### 11.5 新しいライフスタイルの創造

誰もが論理とイメージで悟れる時代、人々のライフスタイルも変化します。江戸時代のような人のつながりと関係性を重視した絆社会を取り戻しながら、判断基準の問題をクリアできた人々が意識の多細胞生命体のように組織(企業、NPO、LLCなど)をつくり、文化・芸術・経済・政治活動を展開するようになるでしょう。

### 11.6 新しい文化・文明の胎動

西洋が産業革命以降に遂げた目覚ましい変化を想えば、新しい認識方式を元に、新しい学問・研究開発が促進され、その新しい学問をベースとした新しい社会システムが構築されて、人々のライフスタイルも様変わりし、愛と信頼と感動に溢れる理想的な社会が実現

できているかも知れません。

物質の宇宙に意識の宇宙を取り入れて、物質経済に心経済を補完する日本発の認識革命。今ここから、新しい時代を創り、それがやがて新しい文化・文明へと成長してゆく姿が、少なくとも私には、はっきりと見てとれます。

### プレートチェンジ (パラダイム・シフト) 「認識革命」と「観術」で新しい時代へ



神を中心に王様が暴力で支配した農業社会、お金を中心に個人が財力で支配する産業社会を経て、新しい時代は、「観術」と認識革命を通して、人間中心の感動社会を創ってゆくの、この日本の使命(JAPAN MISSION)であると、私は感じています。

日本から始まるムーブメントと新しい産業「認識産業」が世界を変革し、新たな時代を創造してゆくことに、私は1mmも揺るぎない確信があります。

学術的な理解方式を補う、観術の認識方式を道具に、アジアから世界を変革させるベンチャー企業が誕生し、東洋の奇跡と言われた戦後の経済復興を可能にした「和の心」「侍の魂」を明確に伝達しながら、誰もが取り入れることのできる教育プログラムとして世界に広く提供してゆく姿が目に見えます。

より具体的なビジョンにつきましては、今後改めてその代案を出して参りますが、今は一刻も早く原発の問題に目途をつけ、多くの日本の皆様が復興の方向性に関心を寄せながら、新しい日本のビジョンを描いてくださればと思います。

この時代の主人公は日本の皆様です。「観術」を道具に新しい産業と未来を切り開き、日本から始まる黄金時代を実現して下さることを、懇切に願っております。

## Noh Jesu

## 本政策提言に関するお問い合わせ先

本政策提言に関するお問い合わせは、下記宛までお願い致します。

NR JAPAN 株式会社      <http://www.nr-japan.co.jp/>

( WEB サイト ) お問い合わせ

<http://www.nr-japan.co.jp/tabid/54/Default.aspx>

< 東京本社 >

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町 13-9 クリエイト桜丘センチュリー 2 1

TEL : 03-3770-5399      FAX : 03-3462-5134

E-mail : [info@nr-japan.co.jp](mailto:info@nr-japan.co.jp)